

地域の魅力紙芝居で

県内に約2万あるとされる民話から、ローカル鉄道沿線に伝わる話を掘り起こし、精神障がい者が描いた紙芝居で伝える。昨秋、仲間3人で「秋田の民話で親子と障がい者とローカル沿線を元気にする会」(秋田市)を設立した。

本業は不動産業。約5年前、県の地域活力プロデューサー育成塾に参加し、知り合った精神障がい者のサポーターから「優れた感性を生かし、絵を描くことで社会との接点を持つことができないか」と相談を受けた。ローカル鉄道好きで、その分野に知己も多かったことから、鉄道と絡めた



長坂博行さん

「秋田の民話で親子と障がい者とローカル沿線を元気にする会」代表

地域振興策が具体化した。

本業で培ったフットワークで、由利本荘市の矢島駅周辺の町内会を訪ね歩き民話を収集。「新所の地蔵様」「津雲の池」の2本を掘り起こした。

地蔵と子供たちの交流を描いた心温まる話、凶作の年に竜神様と結婚させられた娘の悲話、それぞれのテーマ。障がい者たちが絵を担当し、登場人物が表情豊かに描かれた16枚と19枚の紙芝居(A2判)が完成した。3月、由利高原鉄道の協力で「紙芝居列車」を初運行。見た人からは、「絵

ながさか・ひろゆき
秋田市出身。51歳。秋田商業高では硬式野球部に所属した。明治大農学部を卒業後、税理士事務所勤務などを経て、秋田市で不動産会社を設立した。趣味はゴルフ。妻と2人暮らし。



が独創的で温かい」「自分が住む土地にこんな話があったとは」と好評を得た。「地域の魅力を伝えるのは、住み心地を紹介する不動産業と同じ。私の得意技です」。大学時代などを東京で過ごし、県内のローカル線に乗る度に「美しい景色があるのに、

どうして人が集まらないのだろうか」と思いを巡らせた。たどついた答えは「住民が流出していくのは、地域の良さを伝えきれてないから」。命題を基に、過疎高齢化が進んだ秋田にUターンして温めてきたまちづくり構想が、紙芝居列車で一步実現した。

「地元の人知らない民話をもっと掘り起こしたい」。ゆくゆくは絵本を出版したいと夢をふくらませる。一方で、地域振興はまだまだ物足りない。「紙芝居だけではなく、いかに付加価値の高い商品を生みだしていけるか」。まずは月1回程度の紙芝居列車を軌道に乗せ、「もっと県外からお客さん呼び込める作戦を練りたい」。さらに、外国語訳を付け中国や韓国など海外からの観光客誘致も……。構想を語る笑顔から、古里の文化とそこに住む人が「大好き」、という思いが伝わってくる。

【松本紫帆】